

## 序に代へて

- 一 本稿は支那人、特に支那の主要民族たる漢民族の特質を、拾ひ上げたものであつて、就中その惡徳方面のみが、多過ぎる嫌ひがないでもない。素より支那人にも美點はある。併しながらそれがあるが故に、その惡徳方面を見逃す譯には行かない。そこで私は、この方面について、私の體驗を、極めて率直に記述した次第である。
- 二 滿洲の漢人と、支那本土の漢人とは、血族に於いても、性格に於いても、多少の差異はあるが、滿洲國が出来たからとて、その爲め滿洲の漢人だけが、一躍美化された譯ではないから、本記述は、この點にも取捨をして居ない。
- 三 本稿は主として昭和五、六年の頃、業務の餘暇を以つて、已に記述されありしものを蒐集して、隨筆的に書き改めたもので、内容の検討、記述の整理共に不十分ではあるが、過去多年に亘り、冷く出先きの者の實地體驗せる報告を基礎とし、これに筆者の十數年間に滿喫せしめられた實例や、支那人から飲まれた煮え湯の味感やらを、加味して記述したものである。

恐らくは大多数の讀者は『イクラ支那人だつて、マサカ斯んなではあるまい、支那人だつて人間である』と、御考への間もあることであらう。それはそれで宜しい。

四 併しながら、やがて幾年かの後に、諸君が支那人と死生を共にし、利害を共にしようとして、幾度か鮮やかな背負投げを瀟爽せしめられた時に、この小冊子を繕かれたならば、思はず小藤を叩いて『ナール程』と三嘆せられる場合があり得ると、私は確言して置く。

五行文冊、爲めに意到らず、往々にして徒らに支那人の惡徳汚點だけを摘發するに急、却つて感情的に過ぐるやに思はれる點さへあり、支那人の美點を賞める暇のなかつたことを、御話びすると共に、他日續編に於いて、支那人の美點を發掘する機會を、持ちたいものと念じて居る。従つて本篇は、云はゞその前編である。

著 者 誌

## 目 次

### 緒 言

謎の支那—支那は國家にあらず—日支は兩立せず—日支親善は大馬鹿—同文同種は愚案也…………… 一

### 支那を測る尺度

研究の手段—積韻—心理—道徳—習慣—歴史の裏—尺度…………… 五

### 漢 民 族 概 観

シヤボン玉—多元的貫河の文明—世界の垣塙—チャイナ—領土觀念—蠟燭の光—國

家觀—社會文化…………… 六

### 支那を禍する家族制度

蓄妾と陰險—同種團結—食客三千人—質屋と骨董屋…………… 九

### 統治者と被治者

官吏不要—良政は無爲—賈官と換地—軍用金—影法師と金だけ—荷厄介な政府…………… 一三

### 國家組織と社會組織

支那は國家にあらず―自警團―非法治國―我利我慾―散砂……………四

**匪 賊 の 國**

兵匪―土匪―學匪―中華匪國……………七

**支那人の宗教觀**

儒教―敬天と天命說―仁義なく忠孝なし―醜惡の美化―陳平と漢王―頂門の一针―佛教―  
現世を樂土―道教は現世教―一圓か五錢か―功過格―玉皇帝―莊子の無役無用―老子の三  
寶―楊子の利己―墨子の兼愛……………三

**實 利、我 利**

借妻―賣兒―泣き女―ロボット―軍人の念願―商案遺徳―藥瓶……………七

**自 己 保 存**

官吏の心―我不關―病人は請負―親子の情―株式會社―洞ヶ峠……………七

**金 錢 慾**

ニタリ、ギョロリ―二圓に負けろ―賣國―火事場の水―掛け値―俵屋―親善論―金故に……………五

**賄 賂 の 國**

吉良上野介―無給のコック―門錢―外水―中飽―技師長―三方が五圓―釐金局―警官の儲け口……………六

**面 子**

ラッキョウの皮―乞食にも面子―相見の禮―紙幣どらで頼つべた―仲裁と警察―願禮表―  
妙な面子―賣國奴―三千世界の烏―野糞と閨男―友人税―報國の裏……………一〇

**忘 恩**

師肝と天日―叛逆の名人―利用された日本―御禮は現場で―親切は斧で―恩義は商取引―  
神様も御商賣―豫讓野暮―命がけも表情で……………三三

**殘 忍 と 冷 酷**

馬草―妊婦を裂く―血染の饅頭―人肉販賣―屍衣―子女賣賣―香具師―火事場―あゝ無情……………一三

# 裏から見た支那民族性

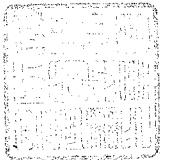
笠井孝著

## 緒言

謎の支那—支那は國家にあらず—日支は兩立せず  
—日支親善は大馬鹿—同文同種は愚案也

華府會議に於いて、佛國代表ブリアンは『支那とは何ぞや』と云ふ謎のやうな疑問を、昇き出したが、確かに支那は謎の國であり、魔の國であり、東洋のスフィンクスでもある。歐洲に偏在する國際聯盟が、支那問題に如何にも認識不足であり、また如何にもアヤフヤであつたのはマダしものであるが、お隣りの日本人も、また支那の實體を、究明することが、如何にも不十分ではあるまいか。日本人は、從來口を開けば、直ちに日支共存共榮を唱へ、同文同種を振り

緒言



孫中山の民族  
と支那

かざし、或は日支の黄色同盟を唱へるものすらあるが、これまた支那に對するペラボウな認識不足と云はなければならぬ。外國育ちの似而非支那人孫中山が、三民主義の大旗を振りかざして、中華民國の革命を提唱するや、恰かも新興支那人の復活であり、明治維新の再來でもあるかの如く、支那革命に隨喜の涙を流した日本人も、決して少くはなかつた。

併し私をして言はしむれば、如上の支那觀は、憐れむべき謬れる支那觀察であつて、支那の主要民族たる漢民族の性情を知らず、世界文化のバチルスである漢民族の暗黒性狀を、顧慮外に置いたものであり、結局は日本人の支那に對する研究不足に、出發して居るものであると言はねばならぬ。私をして忌憚なく云はしむれば、漢民族は四十年來のスレックラシであり、頽廢民族であり、従つてまた支那は、東亞平靜の瘡でもある。

支那は一つの社會  
である

支那は一つの社會ではあるが、國家ではない。少くとも近代組織の法治國と、見做すべき國ではない。或は寧ろ支那は、匪賊の社會であると云つた方が、適評である。然して土匪、政匪、學匪、これ等は支那に横行するところのバチルスである。

日支共存共榮など云ふことは、複雑なる漢民族の心理狀態から見れば、實に唾すべき口頭禪

であるに相違ない。『物資の貧弱な日本が、物資の豊富な支那に對し、文化の貧弱な東夷日本が、文化の勝れた大中華に對する慾求から出た叩頭である』と見るのが、彼等であり、且つまた支那人固有の道義觀念、ならびに心理狀態から割出された日支親善觀なのである。

然して『日本は貧乏で、支那に求むるところあるが故に、親善を言ふのみ。日本のやうな小國は、嚇しつけてしまへば、譯もなくヘコむだらう』と考へて、持出されたものが、すなはち數年前の排日運動である。自尊と、自惚れと、利害打算の排日は、恐らく今後も永久的であると見るべきであらう。永久の排日と、日支の共存共榮？ それは餘りにも解決の困難なる、然して到底兩立すべからざる二つのテーマではある。

支那は日本  
の倍と云ふ  
別

昨今の言葉を借りて言へば、滿蒙は日本の生命線であり、大陸發展は、日本の死活問題であらうが、併し歐洲全土にも匹敵すべき、然して日本の二十六倍にも相當すべき四百餘州の大地域と、多大なる物資とを擁して、支那大陸に頑張つて居るものは、漢民族である。従つて漢民族との關係を調節せずして、滿蒙を語ることは未葉である。然かもこの民族の複雑なる、多面的の心理狀態と、その傳統的以夷制夷の政策とは、永久に日本と兩立すべからざるものがある。

この故に支那に対する穩和主義、叩頭主義をカナぐり捨て、新たなる立場に於いて、日本の死活問題を考へ、新アジアの行途に立脚して、冷靜にこの民族を研究し、冷靜にその對策を講ずることこそは、日本刻下の急務であらねばならぬ。

この意味に於いて、私はつぎに忌憚なき漢民族の内幕を、解剖して見ようと思ふ。これやがて日本の執るべき對支政策の基調ともなり、また對支發展の礎石ともなるべきものである。

## 支那を測る尺度

研究の手段—横顔—心理—道徳—習慣—歴史の裏—尺度

### 研究の手段

支那を研究するには、その國民性を解剖し、之を討究して、有らゆる方面から、觀察する必要がある。斯くてこそ、謎の國支那も、自然に氷解せられ、それぐの場合に應じて、支那人を如何に扱ふべきか、自然に釋然たり得ることと思ふ。支那國民性の解剖に方り、唯單に、我々自己の不完全なる過去の常識から、これを類推することは、頗る危險である。例へば女は、アゲを有するものなりとの過去の經驗から類推して、芝居の役者は、女なりと連斷するのは、笑ひものであると、同一である。

日本人の支那觀には、この種の類推の過失を招き易きものが多々ある。支那人の心理は、日本人の常識では、到底解し得られざるものがある。故に吾々は、先づ彼等の國民性の因つて來

るところの根本原因を、研究して擧らねばならぬ。

然してこれが爲めに研究すべきことは

(一)支那民族の歴史的、地理的、民族的地位

(二)支那國民性の根本である道德觀念

(三)支那人の民情と、大きな關係を持つ其の家族制度、統治者と被統治者、國家及び社會組織の特異なる點

(四)支那の文化の特別なる狀態

等であらねばならぬ。これを更に約説すれば、日本人と支那人との間には、これ等の諸現象の間に、著しき根本的の觀點の差異があり、またその原因となるべき生活狀態、風俗、習慣の間にも、甚だしき逕庭のあることを考へねばならぬ。以下これ等に關する二、三の注意を概説して本文に入らう。

### 支那人の横顔

支那の研究は必要であらうが、さて然らば如何に研究するかと云ふことは、必ずしも簡單なる問題ではない。研究方法と云つても色々ある筈であるが、私は先づ初學者に、支那人及び支那が、如何に日本と異なるかといふ點だけを、研究することを切望する。これが驟然たり、會心の了悟を得られない限り、支那の研究は、未だ門に入らずと云はれても致方がないと思ふ。従つて本書には、その研究の便宜上、支那人なるものを知るべき極めて初歩のアウトラインを記述して見たいと考へる。率直に言へば、日本人の支那研究は、頗る浮調子であると云ひ得らる。日本人は能く國際聯盟や、歐米諸國の支那に對する認識不足を攻撃するけれども、日本人また支那に對する認識不足に於いては、敢て聯盟や、歐米諸國に劣らない方である。近頃一部識者の間には『支那通支那を誤る』と稱し、歐米仕込みのハイカラ道德を以て、直ちに對支態度を、決せんとする人々があるし、さらに『支那通は、支那だけしか知らない。彼等是我々の如く歐米を知らない。歐米を知らずして支那が分るものか』と云ふ歐米通もある。かと思ふとまた二、三十年來の謂はゆる支那浪人を以つて、一括してこれを支那通と考へる人もあるが、これ等のもの總て適當な態度ではない。餘談ではあるが、謂はゆる支那通にも色々ある。一は、支

支那通と  
歐米通とも  
を  
行

那通りである。謂はゆる支那に對する鳩旅行で、上海から漢口、北平、天津と、汽車で一巡して、早速支那通を振り廻す、つまり支那を養通りする連中である。その二は支那通ひで、一年に一度か二度、支那の政情視察の爲め支那に通つて、支那最近知識の保有者と、自惚れる連中である。それから三は、支那に多年在住して、支那を知れりと自ら任ずるが、然りとて支那語すらも、十分には話せず、支那の輿地を旅行したことすらなく、只自惚と、大言壯語以外には、何も研究もしない謂はゆる自稱支那通である。

併しながら今や支那は、是等の歐米通や、支那通によつて、料理せらるべき時代ではない。日本は、自己の死活問題といふ點から、卒直、且つ赤裸々に、隣人の内容を解剖して掛らねばならぬ。

支那人は、世界稀に見る複雑なる心理状態の持主であり、多面體心理の保持者である。由來研究には、先入主となることは、禁物であるけれども、彼等の著しき特異點は、大要だけは、必ずこれを心得て掛らねばならぬのである。

### 複雑なる支那人心理

日本人は遼上で友人に出逢ふと、『ヤア』『イヨウ』と、まるで劍術の掛聲のやうな挨拶をするが、そこに、日本人の竹を割つたやうな心持が、表現されて居る。

併し支那人は、この場合、『ワイ』とか『ウエイ』と呼ぶ。呼ばれた本人は、何事だらうかと、先づ一思案した後、徐ろに身體を捻ぢ向けて、『ウワイ』とか、『ウウウエイ』とか返事をする。この返事が、また頗る曖昧模糊として居つて、イエスであるか、それともノーであるか、またその中間であるのか、ハッキリして居ない。これは支那人の習慣として、黒目をハッキリしない方が、通例であり、且つ保身の術にも叶うて居るからである。

支那では、黒白を明言せず、黒から白に至るまでには、鼠、灰色、淡白など幾百種の色別け、使ひ分けがあるので、日本人のやうにイエスか、ノーの二色だけでは、行けないのである。従つてコンな妙な返事が、持出される譯であるが、曾て張作霖が、北京入城の途中、天津に滞在したことがある。『何日まで御滞在ですか』と問ふたところが、『住一天』と答へた。翌日また尋ねたところが、また『住一天』と答へた。『住一天』とは『一晩泊る』と言ふことである。斯くて彼は十日餘りも、天津に滞在した。

張作霖と住一天



支那人は、彼等の愛蔵の骨董品を褒めて、幾何位しますかと尋ねると。彼は『二百塊錢』と答へる。百圓餘りと言ふことである。百圓餘りとは、百一圓から百九拾九圓までのことの積りである。こゝ等にも、彼等國民性の曖昧模糊たる特殊なる閃きがある。

### 支那人の道德觀

凡そ一國の國民性は、その民族の歴史、文化、政治組織、社會狀態、環境等によりて、左右せらるゝものであつて、我々日本人の道德觀念を以つて、直ちにこれを支那人に適用せんとしたり、我々日本人の善惡の尺度、我々の心理狀態その儘を、直ちに支那人に適用しようとすることは、間違ひである。

10

日本人の中には、我も人なり、彼も人なり、苟くも至誠を以つてこれを導けば、支那人と雖も、必ず反省するだらうと考へたり、自己の環境と、自己の習慣から、その儘これを支那人に適用し、支那人を批判しようとする者があるが、これ等は何れも至當でない。二、三の例を擧ぐれば、支那人は、好んで人の品物を盗むが、これが發見せられても、別に悪いと思はないの

支那に於ける  
の習俗

みならず、その品物を取戻すと、折角取つたものだから、幾分か手間賃を呉れると言ふ。斯んなのが日本人では、一寸理解し兼ねる心理狀態である。

また支那には『男女七歳にして席を同じくせず』とか、または『遂に遺を拾はず』などと云ふことがあるが、これは七歳で同席したり、遺失物を横領したりするからこそ、是正の必要があり、その爲めに發生した道德律であり、警戒の言葉であるに過ぎない。これをエライなど、誤まつて考へるのは、親手を取違へたやうな事件である。

支那人は忘恩的であつて、御禮を言はないと、八釜しく憤慨する人があるが、支那人に言はせれば、一度御禮を言へば、それで澤山であると考へて居り、日本人のやうに、出逢ふ度毎に、何回も御禮は云はない。またそれが彼等の習俗である。

11

### 習慣風俗の差異

一々この種の心理狀態の相違を、拾ひ擧げて居たのでは、實際がないが、日常の風俗習慣の上からも、支那人と、日本人とは、甚だしく相違して居る。日本人のマッチの摺り方や、鉛筆

の割り方と、支那人のすることは、全然アベコベであり、日本人は、鉋や、鋸を、自分の方に引くが、支那人は、先方に推して行く。食事の時に、我々は箸を横に置くが、支那人は必ず縦に置く。洗面をするにも、日本人は、両手に水を掬つて、手でアルムとやるけれども、支那人は、手の中に顔をつけて顔をクルリくと廻す。一事が萬事、所變はれば、品變はる。日本人と、支那人とは、色々に違ふものである。

支那人は、婦人の室を窺くことを極度に嫌ふ。また足首を出すことを、非常に淫猥なことと考へるなど、習慣上からも、種々違つて居る。また同じ支那人でも、北方人は、氣が長くてエツタリして居るが、南方人は、氣短かで、多少日本人に似た點がある。

この外日本人の皇室に對する觀念の如きは、支那人には、到底解し得られない事件であつて、日本人の皇室觀と、支那人の君臣觀念との間には、全然合流し得ない根本的相違がある。

國境觀念や、國家觀念も、また全然違つて異なつたところがある（これは別に後述べる）。宗教的な考へに於いても、支那人の考へ方は、何處までも現世主義、その場主義であることは、これまた後に述べる通りである。

### 美化された歴史の裏

支那研究に方つて、心得なければならぬことは、支那の文獻は、美文を以つて、醜惡を美化し、不仁不義を覆ふて居ると云ふことである。このことに就いては、支那人の『宗教觀』なる部分に於いて述べるが、支那歴代の史實の記録を以つて、その儘支那の實狀と解することは、大なる危険である。

支那人の議論、乃至文章を見るに、如何にも大義名分に透徹し、愛國心に、燃えて居るかに見えるが、その裏面には、彼等個々の個人的利害とか、賣名觀とか、打算的原因やら、動機が多分に働いて居るものであつて、表面の美化を以つて、直ちにこれをその儘受入れるのは、支那では、夥しく考へものである。

### 認識と尺度

つぎに間違ひ易いことは、儒教に對する日本人の違算である。

由來日本人は、支那人を見るに『支那は孔孟の國なり』『彼も人なり我も人なり』などい、支那人を日本人扱にする癖がある。通例的に云へば、世界の道徳は、多くは共通的であるから、日本の道徳習慣を以つて、これを歐米人、インド人に適用することは、必らずしも誤りではない。併し我等の道徳觀念を以つて、直ちにこれを支那人に適用することだけは、偉大なる誤りである。私に云はせれば『支那人は人に遠く、寧ろ豚に近い』。彼等は仁義なく、忠孝なく、義務心なく、犠牲心なし。況んや人倫の道、五常の徳の如きは、四百餘州を探しても、獲にしたくもあるものではない。

日本人が支那を研究するに方りては、先づこの道徳觀念の根本から、その尺度寸法を改造して掛らねばならぬ。

また支那人は、増長限りなき民族である。『隴を得て蜀を望む』といふ諺があるが、支那人は、如何にしても、遠慮を知らぬ増長民族で、相手弱しと見れば、何處まで附け上るか分らない民族である。歐米人からは『チヤイナ〜』と呼ばれ『メイド・イン・チヤイナ』で、別に異義なくやりながら、日本人に對しては『支那』と呼ばれることを忌避し『中華民國』と書かなければ、

支那人に對する  
支那は  
日本人  
支那民族  
何なることぞ

公文書を受取らないなど云ふのは、そもく日本の溫和政策を、馬鹿にして居るからである。従つて支那の研究に遠慮は無用である。赤裸々に忌憚なく、その内幕をサラけ出して見ることによつてのみ、支那研究は可能である。

以上の諸點は、漢民族の研究上、必らず考へねばならぬ豫備知識を掲記したまふで、これだけで勿論足りとする次第ではなく、またこれで主なるものを、盡して居る譯でもない。只單に支那研究上の手ほどきを、述べたものに過ぎない。

## 漢民族概観

シヤボン玉—多元的黃河の文明—世界の垣塙—チヤイナ—領土觀念—

蠟燭の光—國家觀—社會文化

### 歴史的地位

日本と支那とは一衣帯水の國であるにも拘はらず、日本人ほど支那研究の不十分なるものは稀である。從來支那に關する幾多の研究、乃至文獻の如きも、歐米人間には相當多數にあるけれども、日本人の研究には、兎角十分でないのが多い。隣邦支那を研究するのに、出來てはつづれ、出來てはつづれるシヤボン玉の如き支那軍閥の興亡を、一喜一憂し、また革命戰や、内争や、南京事件や、排日や、經濟絶交等々、逐次遷り變る事件の根柢を究めずして、只單に目前の時局問題を論じ、支那の將來を議するの輩が、多數にあるが、四千年來培れたるその國民性と、社會狀態の實相、裏面は、實に複雑多岐であつて、これを追究し、その根本認識を確實

16

にして、不變なる國民性を通じて、時局を論じ對策を論ずることが、支那では特に大切であり、その根柢を究めずして、風のまに／＼動くところの枝葉末節を見て、徒らに對支策を論ずるが如きは、愚の骨頂である。

早い話が、隣人の性格を知らず、經歷も知らずして、これを批判し、これと親善するの、喧嘩をするのと云つて見たところで、所詮無駄なことである。萬人皆不可解とする隣邦支那を研究するには、先づその國民性を研究せねばならぬが、國民性は地理、歴史、習俗等の反映である。故に先づ支那を形成する主要民族たる漢民族の由來を、嚴に討究するの必要があるのである。

17

順序として、先づ上古以來の支那歷朝の變遷、日支交通關係等を、想起する必要があるが、それは専門の研究資料にゆづり、今その概要を摘記すれば、次ぎの通りである。

支那二十四朝興亡の跡を尋ねるに、それは謂はゆる易世革命であつて『天下は天下の天下なり』との思想が、濃厚に動いて居る。然れば、金、遼、元、清の如く、異種民族が、中原を統治しても、彼等漢民族は、少しもこれを不思議とせず、三代以來、未だ會て嚴密なる意味に於

苗族  
支那貴州

の外に雲南、貴州地方には苗族あり、その他邊疆地方には、漢土の前住民族である幾多の民族が、混血して居るので、支那人を研究するには、漢民族だけを研究したのでは、十分ではない。

(五)地勢 南船北馬の語に漏れず、揚子江流域を境として、南北の地形、人心、風俗にも、多大の差異がある。殊に南方兩廣地方は、住民の性質、氣風等も、支那本土の漢人と著しく異なる點がある。併しながらこの廣大なる土地と、大陸的氣候の自然が與へたる感化は、支那本土の民心をして、悠久、寛容の氣風を召來せしめたことは争はれない。土地が廣大で大陸的であること、言語風俗習慣の差異は、南北支那を一括して、支那と呼ぶよりも、各省毎に、これを一箇の獨立地方と看做すのが、寧ろ至當なやうに思はれる場合がある。

24

### 漢民族の特質

(一)領土觀念 元來支那人には領土觀念、言葉を換へて言へば、國家觀念なんて云ふものは有り得ない。天下といふ言葉がある。天下はこれ權力の及ぶところ、すなはち彼等の天下である。權力の及ばざるところ、支那人はこれを化外の地と考へて居る。滿洲蒙古の土地は、支那

から云へば化外の土地である。化外の土地を扱ふのに、何も遠慮などをする必要はない譯である。斯くの如く支那の政治は、蠟燭の光の及ぶところ、即ち所謂天下であり、領土であり、政治である。だから蠟燭の光の及ばざる邊境は勝手たるべきで、現にロシアは、蠟燭の光の及ばざる蒙古の境界に、隈なく哨兵を配置して、ドン／＼進出して居るではないか。北にこのロシアあり、西に英國の西藏ありといふ有様で、遺憾ながら、蠟燭の光の及ばざるところ、また政治なきの状態を暴露して居る。

漢民族の矜持とする文化優越感と、長城を越えて侵入する塞外民族の武力侵略とは、文弱の民、漢民族をして、卑屈なる自己満足によつて、一時を誤魔化すことのみ腐心させ、爲めに猜疑心を養ひ、陰險なる習俗を、養成するに至つたが、これ等の侵略者に対する優越感より、却つて侵略者を屬國扱をし、屬國と考へて喜んで居るなど、支那人の領土觀念は、一寸一般と違つたところがある。

25

彼等の所謂領土とは、統治權の及ぶところを稱するのではなく、自分と交通往來のある一切のものを領土と稱し、自分の部下と考へるのであつて、つまり蠟燭の光の及ぶところすなはち

我が天下國家なりと、泰然として考へて居る。近來外國との往來頻繁となれる爲め、この蠟燭の火光の及ぶ範圍を段々縮小せられ、そこで已むを得ず、ロシアや英國を相手として、國境を劃定せなければならぬ仕儀に立到つたが、これは眞に已むを得ずして、こゝに及んだもので、彼等本來の觀念では斷じてない。

(二)國家觀念 『支那は國家に非ず』との説をなす人が、屢々あるが、全くその通りであり、これを内部的に解釋して見ると、支那は、到底近代國家の組織を有して得るものでないことが分る。或る學者は、支那は人間の一大グループであり、社會ではあるが、國ではないと稱して居るが、全く其通りである。つまり支那に取つては、國家なる名稱は、諸外國との國際條約等を定める爲めに、已むことを得ず、押しつけられた名稱であり、支那人の考からすれば、狹量なる國境主義や、領土的國家觀念を超越して、國家、君主などを問題にして居ないのである。これは政治の要道は、税を徴せないことであり、治者は關せず、被治者は興らずと云うて、これを彼等の政治の根本的觀念として居るのでも分ることである。

漢民族は、口と腹とは表裏相異なり、口舌の反覆常なく、多面體的の頗る複雑なる心理の持

主であり、到底我々の心理を以つては、推察出来ない民族である。彼等が時と場合により、幾多の異つた心理状態を發揮する原因は、以上述べたことの外、次項以下に述べるやうな家族制度の害、統治者の無力、社會組織の缺陷等も、また大なる原因となつて居ることを、見通がしてはならない。

(三)社會文化 支那文化は、最近まで未だ太古文明の範圍を脱せず、家庭工業と、徒弟制度の經濟組織であつた。従つて最近西歐文明の輸入により、急速に工場や、會社が出来て、經濟的變革を召來せしめんと、努力して居るけれども、マダ近代文明の範圍に轉化するには、幾多の難關が横たはつて居る。

支那は、最近五十年前までは全く手工業のみの國で、會社や、銀行や、鐵道工場等の工業の如きものは、主として國匪事件後に於いて、發達したものである。初めて吳淞上海間に汽車がレールの上を走つた頃は、ヤレ魔物だとか、或は怪物だとか唱へて、それに向つて投石し、或はレールの破壊を企てるなどのことを、盛んに遣つたものである。それは今から僅か四十餘年前に過ぎない。支那ではストライキとか、諸種の労働運動の如きものも、極く最近十數年より

起つた現象であつて、かゝる團體的運動を以つて、今日の支那人を、統制あり、團結ありと觀察することは、間違つた話である。眞實の支那人を觀察しようとするならば、その手工業組織下に於ける家庭工業、徒弟制度方面の舊式支那より、先づ以つて觀察せなければ、その眞諦は分らない。

## 支那を禍する家族制度

妾妻と陰險—同種團結—食客三千人—質屋と骨董屋

諺に『氏より育ち』と云ふことがあるが、支那人の國民性を觀察するには、その因つて來るところを窺つて見ることが、特に必要であると思ふ。支那は、大家族制度の國である。古來姓氏族裔の維持保存を、八釜しく云はれた關係もあらうが、同族の結合は鞏固であり、家々には、各々族長があつて、族長は一切資産を管理すると共に、一切の家族も、皆その權力下に擁護せられて居るのが多い。換言すれば、私が家長だとすると、一切の財産家族は、私の管下に屬する。その代り妻子兄弟は勿論、叔父、叔母、弟の妻、妾からその子に至るまで、生きとし生ける者は、皆その管轄扶養を受ける譯であるから、依頼心と、無自覺とが、この間に培はれるのも自然である。また一方支那人の習慣として、血族の斷絶を嫌ふ關係から、妾を蓄へる習慣があるが、金持になると、三人も、五人も、七人もの妾を蓄へ、それが皆同じ一家の中に、正妻な

ど、同様し、その妾には、夫れどくの召使、子供、乃至は食客までも居るのであるから、一家族は、一寸したところでも三十人、五十人になる。これ等の妻や、妾が、御互に鑄を削り、裏面の暗闘に、日もこれ足りない有様になるのは、當然の次第であらう。支那人が陰險、残忍であるとか、且つ陰謀性に富み、毒殺とか、詐謀姦悪等各種不道德の多いのも、起りはこの邊からである。

一夫多妻で、一家の中に多くの妻妾同居し、これ等の妾が、それどく多くの子供を生む。子供同志は、何の関係もないので、盛んに相排斥する。妻妾は、黨中黨を建て、召使まで黨同伐異、裏面の暗闘をやる。これ等の反面には、またお互に子供同志夫婦になるのもあるし、妾の子供と、他の妾とが姦通したり、家族の某と、妾とが通ずるとか云ふやうな、陰險奸悪絶え間なしである。大きな一家になると、このやうな人間が、百人も、五十人も、同居するものがあるが、斯うなると自然相互ひに葛藤を生じ、相排斥の結果は、陰險極まる性格となり、中傷離間讒訴を事とし、終には人を殺すのやら、殺人をせざるまでも、毒藥を盛ると云ふやうな手段を取るに至るので、これが今日の支那人の性格の半面を作り上げて終つたとも云へる。斯くし

て残忍にして陰險な性格は、この家族制度から發生した最大の産物であり、この複雑な家庭的環境から培かはれた、根柢深きものである。

さらに支那人には、同族、同郷、同學、或は同業者なるものゝ相團結する習慣が、生れて居る。同族は、血縁團體として、同郷者は地縁團體として、その外に同業團體やら、職業團體やら、社會的に、この種同種類のものゝ相聯合して、團結する習慣がある。これは支那のやうな、國家の統治力の弱い國では、一族一村の自衛上からも、この種の團結が必要となるのであるが、その結果は、頗る變挺なものとなる。例へば私が、假りに知事になるとか、或は他の役人になつたとすると、そこへ先づ一族相携へて、中には妻妾迄も召し連れれた食客が、押しかけて来る。同郷者は、同郷者で、何とか云ふ名目で訪ねて来る。同期生は、同期生で、同學であるとか、同校出身であるとか、種々なる口實で訪ねて来ると云ふことになる。ところで支那人の習慣として、この種の食客を、一月でも、二月でも、快よく置いて、敢て嫌な顔もしない。これは慣例上然うする迄であり、また、面子上然う努める點もあるが、兎も角大變なことになる。従つて孟嘗君の謂はゆる『食客三千人』の如きも、必らずしも法螺ばかりではなかつたと思はれる。



支那の社会制度が、右のやうな有様であるから、家長、族長になる者は、自然多額の経費を必要とし、妾を連れて食客に来る次男坊、三男坊から、その下女、下男までも養つて遣らなければならぬのであるから、その経費たるや、また到底少しでは濟むべき筈がない。

日本あたりに留學した新進の若者が、非常な意氣と、決心とを以つて、心筋に青雲の志を抱いて歸郷するのであるが、一度郷里に入れば、右のやうな家族關係から、有象無象を、一切自分の手に引受けねばならぬ。廉潔政治を謳歌して、回天の意氣を以つて、官途に就いた新青年も、この集團の中では、トウ／＼已むを得ず、やはり金錢慾の爲めに、働かねばならぬ破目になり、やがてそれが收賄となり、不正事件となり、金錢に餘念なきに至るのも、また已むを得ないことではないか。

私に一人の友人が居る。彼れは聯隊長であつた。位は陸軍の少將、月給は三百圓である。彼れは日本留學時代に、相思の仲となつた日本娘と、支那の家族制度から押付けられた第一婦人と、第二、第三、第四婦人を持つて居た。これ等夫人との間に出來た子供が、大小合せて十七人、その子供等に、一人々々の丫頭、すなはち召使と、外に門番、馬夫、掃除苦力、コック

及びこれ等の妻子まで合せると、如何に少く見積つても、一族五十餘人である。これだけの人間の衣食を預かつて居たのでは、月三百圓では到底足らう筈がない。そこで已むを得ず、悪いとは知りながら、月々官金をゴマ化したり、部下の頭を刎ねたり、乃至はヘソクリで以つて、別に何等かの商賣でも、兼業せなければならぬことになる。『これでは私が貪官汚吏たるも、また已むを得ないでせう』と、ツク／＼彼れは、私に述懐したことがある。

支那人はよく初対面に際し『アナタは何商賣ですか』と聞くが、イヤ私は官吏でこれくだと云ふと、『それは知つてるが、御商賣は何ですか』と聞き返す。『官吏や、公吏に、商賣がある譯はないではないか』と云ふと、彼は如何にも不思議さうに、腑に落ちない顔をして、支那では將軍でも質屋をやり、知事が、骨董屋や、女郎屋を經營するのが、當然だと返答する。斯くの如くにして、家族制度そのものは、必ずしも悪いことではないとして、支那に於いては、その弊害の趨くところ、腐敗の種因が、こゝに時かれることを、如何とも爲し難い。

以上述べたことは、家族制度の不良なる反面のみを、記述したのであつて、五世、六世にも及ぶ百何十人かの大家族同居も、珍らしくないのみならず、實に一糸紊れず、感心させられる

のも少なくはない。この家長が、絶対の権利を持つて居り、各人は、金を得ても、勝手に使はず、共有財産として、一家の生活に當て、一家中誰彼と云はず、良く扶け合つて、誰れの子と云はず、泣いて居れば乳もやり、世話もしてやると云つた、誠に靄然たる點もないではない。従つて支那では、一家の繁榮、一族の榮譽の爲め働くのが、固定せられた習慣となり、また従つて君恩、國恩よりも、先づ以つて家門の爲めを考へる。その代り一人悪ければ、一族が誅せらるゝ。即ち罪九族に及ぶと云ふことなども、珍らしくない。只こゝでは家族制度の内容を、詳述するのが、目的ではないから、これは省略して、唯家族制度が齟らしつゝある悪い一面のみを述べて置く。

## 統治者と被治者

官吏不粟—良政は無爲—賈官と換地—軍用金—影法師  
と金だけ—苛厄介な政府

支那二十四朝の歴史は、易世革命の歴史であることは、前に述べた通りであるが、そもく支那人が、官吏になり、政治家になるは、何の爲めかと云ふに、それは天下國家を治めんが爲めでなくて、一に金を儲けんが爲めである。支那では、治者と被治者とは、判然區別せられて、永久に一致することのない、別な軌道を、歩いて居るのであるが、その内治者は、如何にして民衆から金を搾り、如何にして金を儲けるべきかを考へるのみで、治めらるゝ者の利害なんかは、全く問題にして居ない。『依らしむべく、知らしむべからず』とは、支那の封建制度時代から、今日まで終始一貫、奉じて易らざるところの統治者の鐵則である。

支那人には國家觀念がない。否、國家觀念がないのみならず、被治者は、一種の無政府主義者である。勿論歐米諸國に於けるアナキストとは異なるけれども『官吏と、土匪と、警察と

なること位は、平氣の平左である。従つて刑法でも、民法でも、その時の賄賂と袖の下次第、  
 彼等の風向き次第で、如何やうにも變更し得るのである。彼等は端的に云へば、法的無責任者  
 なのである。

それにも拘らず、彼等が、國權とか、愛國とか、八釜しく云ふのは、彼等の對外、對内上の  
 一種の體面からであつて、外國に對する必要上からのみ、國家と云ふことを意識するけれども、  
 支那人なるものは、煎じつめたところ、個人以外には、何もものない民族である。だから支那  
 人の用ふる國家とか、國民とか、愛國とか、國權とか、國益、國境などの言葉は、悉く『國』の  
 字を取去つて、『我』と云ふ字を、置き換へるべきものであり、然うすれば意味が極めて明瞭に  
 なつて来る。また従つて愛國とか、利權回收とか云ふものは、名前は堂々として居るけれども、  
 所詮は我利、我慾を遂げるまでの賣名的看板に過ぎざる場合が、頗る多い。

支那人の統治觀念は、前にも述べたやうに、國威の及ぶところ、すなはち天下である。『天下  
 は天下の天下である』との觀念が濃厚である。すなはち蠟燭の火光の及ぶところが、天下なの  
 である。従つて國境觀念などは、極めてアヤフヤであり、この民族は、何處まで超國家的の民

族であるか、分らない一種のコスモポリタンであると云ふ、強い印象を受ける。國民教育など  
 と云ふものも據るべき根據はなく、孔孟の教のやうなものでも、爲政者の便宜主義から、利用  
 せられて居たに過ぎないし、社會主義、共產主義の如きも、早く四千年の昔から、唱へられ、  
 考へられて來たと云ふ國柄である。かるが故に彼等に取つては、國家組織など云ふものは、他  
 人の著て居るオーヴァ・コート見たやうなもので、彼れに何等の實在と、利害があるものではな  
 いと云ふのは、當然以上の當然でなければならぬ。

これを要するに、漢民族は、謎の民族である。ユデア民族と共に、世界に於ける最も頽廢し  
 たる、然かも社會的、民族的には、永久不滅の民族である。

支那人は、能く我等に向つて云ふ。『我々はアナタ方よりも、數百年だけ、文化が進んで居  
 る。だからモウ二、三百年も経てば、歐米人もアヘンも吸ひ、麻雀もやる、賄賂も取ると云ふ  
 ことになる。さらに五、六百年もすれば、日本人も、我々と同じ程度の個人主義となり、バク  
 チでも、毒殺でも、アヘンや、モヒでも、朝飯前になる』と。これは彼等の眞實なる半面を遺  
 憾なく發揮するところのエピソードである。つまり支那人は、散砂の如き民族である。水か、

ては、上は大總統から、下はボーイ、小僧に至るまで、手取早いところ皆匪であり、それが居る地位によつて、官匪、土匪、學匪と云つた工合に分れるだけで、何れも匪たるに於いて、擇ぶところがない。大谷光瑞氏は、謂はゆる『中華民國にあらずして、中華匪國なり』と、斷案を下して居るが、全くその通りで、極端な悪口を云ふならば、支那をリードするものは、生きんが爲めに働らく土匪の集團であると、云ふことが出来る。

普通の日本人は、喧々騒々たる排日運動、愛國運動を見て、これは大變だと、喫驚するが、これは別に驚かんでも善い。あれは要するに學匪共の排日屋とか、愛國屋のする仕事である。彼等は、排日業が商賣であり、愛國業が本職なので、諸君が會社員であり、銀行員であるのと何等變りはなく、愛國屋、排日屋等は、所詮は鉛屋のラツパ見たやうなものである。元來支那三億九千九百萬の庶民階級は、排日屋、愛國屋には無關心である。讀書階級、治者階級(別の名を學匪、政匪と云ふ)と、庶民階級とは、全然別な軌道を歩いて行くものであり、この兩者は最初からレールが違ふので、永久に異なる途を行くべき運命にある。インテリ階級は、鉛屋のラツパを吹き、庶民階級は、イヤ／＼ながら、鉛が欲しさに、このラツパに跟いて躍るので

ある。支那の實際を知らうとすれば、この鉛屋のラツパに、惑はされてはならない。何となれば、あの八釜しいラツパ吹きの鉛屋がなかつたら、自分達は、何んなに幸福であらうかと考へるのが、彼等庶民階級なのであるからである。彼等庶民階級は、自ら耕し、自ら勞働し、營々として努力し、郷村は郷村、錢業は錢業、小賣屋は小賣屋と、それ／＼の環境に應じて、自ら小社會を形成し、その上に國家も、統治者も、何も存在すべき必要を認めない。民衆は平穩に生存が出来、生命財産の保護をして呉れるものさへあれば、その英たると、米たると、將た元たると明、清たるとは、彼等の問ふところではないのである。だから支那は、國家にあらずと云ふので、嫌がる坊やに待著せて、先代萩の千松様で奉られるよりか、泥のついた鉛玉でも、大きいのを一つ貰ふ方が、庶民の本當の喜びである。

同一系統に属するものと、考へられる。

また道教では、一年中の善悪を、功過格と云ふもので決めて、一年の終りに、それだけの總決算をすることになつて居る。例へば人に錢を施せば、善五十點、人のものを盗めば、悪百點。それも金高によつて、一圓を盗めばイクラ、著物を盗めばイクラと云ふやうに、善悪の點數をつけ、それで年末になると、神様が、總勘定をなさることになつて居る。そこで何處の家でも、年の暮には、過年（正月を新年と云はない）と云うて、竈のお祭をして、各戸各家の竈の神様が、一年間の功罪を、天帝に報告することになつて居る。そこでこの日には、神様に飴を供へ爆竹をならす習慣がある。飴を供へるのは、竈の神様が、天帝のところへ報告に行つても、飴が竈に拵まつて、しゃべれないやうにするのださうな。それから爆竹を鳴らすのは、神様が天帝に報告されても、天帝の耳に聞えないやうにするのだと云ふのである。何處まで現實的であるのか、奥底の知れないところが支那式であり、神様に飴をネグらせるところなども、振つて居る。

道教は、春秋戦國の時代を経て、人心漸やく内省的となり、何か心に頼るものもがなど、寂寞

と頼りなさ、淋しさを感じて居た時に、世に糺まつたもので、世道漸やく經世致用の學から、遠ざからんとして、秦皇、漢武のやうな人でも、神仙不老の術を求めたり、方士を招いて、怪術に耳を傾けるなど、兎角心の慰安を欲した時代相に投じたから、存外人心に合したものであると云はれて居る。

道教の教義に老、莊の學説やら、その時代の迷信やら、諸説やらを巧みに取入れて、心の平安と、長生保健の道を説いたのは、彼の張道陵（後漢順帝の時代）である。老、莊の如きも、謂はゞこれに利用せられたまでと、何も老子が、自ら道教の開祖として、祖述した譯ではないのであるが、何時の間にか奉られて、祖師とか、玉皇帝、神仙などと呼ばれて、今でも民衆俗教の祖神と思はれて居るのである。尙ほ道教と雖すべからざるものに、鬼神説やら、風水説やら、支那特有の迷信、信仰などがあるが、これは別に機會を得て述べることにする。

### 老子と楊朱と莊子

支那人の人心を支配するものは、老莊だけではないが、支那人に個人主義を敲吹したものは、

この老、莊の説が、興つて力がある。老子の如きは、末年『關を出で、その落つる所を知らず』と傳へられて居るが、老子の仙骨は、『世の中が何んなにならうと、自分の關知したことではない』と云ふやうな、絶対個人本位の態度を、朗らかに表示して居る。

莊子に至りては、無用説を稱へて、何等世のなかに役立たないものが、最もよく天命を完うすることが出来る。橘、梨の如きは、食用になるが爲めに手折られるけれども、樗、櫟の如きは、無用であるから、天命を完うすることが出来る。吾人もまた世に處するには、無役無用であることが、大切であると云つて居るが、莊子の説は、老子楊子とは異なる點が多い。以下老、楊に就いて、少しく述べて見よう。

老子は、春秋時代、孔子より先きに生れた人であるが、彼れは自然の道、赤裸々の人たることを説いたので、一に清淨寡慾を説き、慾望は罪惡邪心の基因である。二に人爲を去り天真であれ、禮法繁くして奸智偽飾あり、大道廢れて仁義あり、一切の人爲を去りて、自然の純眞を保ち、忠信の人たれ。三に自謙の柔徳を唱へ、水は卑きに就きて、争はざるも萬物を利す、柔よく剛に勝ると、驕慢を排斥し、消極的に謙徳の重んずべきを教へたが、『我に三寶あり、一、

老  
子  
清淨寡慾  
天真に  
自謙柔徳  
を重んず

慈、二、儉、三、不敢爲天下先』と云つて、寡慾、天真、自謙の綜合を説いて居る。この内で、柔徳、無抵抗主義の如きは、消極一途のものと見られ易いため、却つて後人から、謬つて見られた點もある。

莊子は、老子のことを至人、真人など云つて、これを神仙化し、後漢の張道陵に至りては老子を神仙三尊の一に祀り上げ、トウ／＼道教の祖神に昇り上げたのである。

楊朱楊子の説は、老子の獨善、獨全思想、自然思想の足らざる他の半面を補うたもので、その説を擴充したものである。『禮文虚偽をカナぐり棄てよ、仁者必らずしも壽ならず、義者必らずしも富まず』『實に名なく、名に實なし、名とは偽のみ』『得難き人生を、名譽や、富貴に空費するのは愚である。宜しく自然慾に循ひて、悦樂すべし』と云ふのが、その根本である。

楊朱は、他人の爲めに、一毛を抜くことを欲せず、天下の物を盡して我れに奉ずるも、自己を束縛するものは、我れ之を採らずと云つたのは、有名な話であるが、彼れが個人の利己的享樂主義を、飽くまで透徹せしめようとしたこの態度は、墨子などの犠牲的奉他思想と、兩立しない點がある。これを討究するには、楊朱と、墨子の弟子禽子との對談を、述べるのが捷徑で

楊子の死  
楊朱と楊子の  
関係？

あろう。禽子曰く『アナタの一毛を抜いて、一世を濟ふべくんば如何』。楊朱『世は、固より一毛の能く濟ふところにあらず』。『濟へたとしたら如何』と遣つたところが、楊朱應へず。禽子出でてこれを孟孫陽に語る。そこで孟がヒヤかして曰く『子、夫子の心に違ひざるなり。若の肌膚を侵して、萬金を獲るとしたら如何』。禽子曰く『我之を爲さん』。孟孫陽『若の一節を斷ちて、一國を得るとしたら如何』。禽子默然たり。孟の曰く『一毛は肌膚より微に、肌膚は一節より微なること<sup>おもひふ</sup>なり。一毛は固より一體萬分中の一ではないか』。禽子が困つて仕舞つて『何と答へて善いか分らないが、子の説は、老聃(老子)、關手(西關の尹喜は老子隱遁の際老子に道を求めた人)に聞けば分るたらうし、私の説は大禹、墨翟(墨子)に聞けば、分るだらう』と答へて、別れたさうであるが、この問答は、楊子と、墨子との思潮の相違を示して居る。

68

支那人仲間では、その社會狀態から、個人的利己的心理が、昔から發達し過ぎて居たし、これを助長し、これに理窟づけたものは、老莊の學と、道教あたりの俗教が、やはり多くの責任がある。

## 墨子の兼愛説

老楊の個人主義と對立するものに、墨子の兼愛説がある。墨子(墨翟)の兼愛説は、彼れ自から云ふが如く、利己主義、實利主義の時弊を救濟せんが爲めの、對症藥と考へられたのもであらうが、この教義は、他人の親を視ること、我が親の如く、他人の身を視ること、我が身の如く兼ね相愛し、兼ね相利すると云ふ、平等無差別愛を、強調するところにあり。學説の根據を理論に指かず、天神、天意を採用し、鬼神の存在を信じて『上は天を尊び、中は鬼神に事へ、下は人を愛す』と、古聖の事蹟より歸納して、宗教的信念によつて、兼愛公利を圖つたのである。ところが徹底的に個人主義である支那人仲間には、この説が實行される筈はないので、却つて彼れの唱へた非戰的平和的主張のみが、支那人一部の人心を支配して居るのみで、昨今の支那に兼愛なるものはない。

69

## 實利、我利

借妻—賣兒—泣き女—ロボット—軍人の念願—商業道徳—薬垢

私は以上で、ほぼ支那人研究の端緒を、書いた積りである。以下支那人の個性を、解剖することに取掛る。

支那人は實利、實益の前には、何ものをも犠牲として悔いない。換言すれば、冷酷そのものであると云つて善い。支那には昔から、大義親を滅すと云ふ言葉があるが、彼等は、利益次第では、親をも殺し兼ねないこと勿論である。それから支那には、借妻と云ふことがある。自分の妻を、幾何かの金で、一年なり半年なり、人に貸與へることである。またこれと反對に、家郷に妻を残して、遠く出縁に行つた夫の留守中に、妻君は臨時の居候を住み込ませて居り、主人が歸れば、この臨時の旦那は、幾何かの金を貰つて、漂然として去り、彼我共に敢て意に介せないのがある。支那の各地では貧困者は三つ、四つの小兒を籠に入れて荷ひながら、市井に

70

賣る習慣があるが、餘りにも悲惨な習慣である。三元、五元で、街上から買はれた子供等は、男であれば、一生ユキ使はれ、女であれば、年頃になれば、妾にも昇進し、或は上官への贈物などにも代用され、顔の悪いものは、一生丫頭、すなはち無給の女奴隷となるのである。支那人のすることは、實利の前には、只蛇の冷たさがあるのみで、人情味も何もあつたものではない。

支那の笑ひ話に、首つりが腰に繩を括りつけて居る話がある。『オイそれでは、死ねないではないか』と云ふと、『實は首にも引つ掛けて見ましたが、どうも、呼吸が出来ませんので』と答へた話があるが、第六感の敏感な、實利に先見の明のある支那人の、ホントウに遣りさうなことではある。

71

支那の墓地に行くと、よく『オーウ、オーウ』と聲を張り上げて、哭く女がある。泣き女である。雇はれて、一旦二、三十錢で泣くのである。泣いて居る最中に、話などを仕掛けると『聲の善い悪いで、色々値段も違ひます。私などは安い方です』と、一鎮り我々と世間話をして、また『オーウ、オーウ』と、涙も鼻汁も、一緒に流しながら泣くのが、『聲涙俱に下る』やう



ないものであることを、能く知悉して居る。従つて自分は、自己だけの未來を、セツセと開拓して行くのみで、この間には、親も、兄弟も、義理も、人情も、考へては居られない。況んや友人や、近親などのことは、外形は兎も角、内實は一切顧みないのが常である。すなはち彼等の進退座臥は、自己保存の四字に盡くる。一切の行動は、他人の陥穽に對し、如何にして自己を防衛し、保持し、増大しようかによつてのみ、決せられるのである。

この故を以つて、日常生活の間に於いても、支那人は極度に自己本位である。自分の職分として、定められた以外のことは、相互に助け合ふことは、殆んど稀れで、特別に自己の利益にでもならない限りは、遣らない。俄か雨にボーイは、アワて、御自分様の洗濯物は、取入れるが、さて主人の布團や、友達の上物などは、取入れない。人の物を取り入れて、若しも無くなつたり、損傷させた時は、自分の責任である。君子は危きに近寄らず』と云ふのが、彼の申條であり、觀念でもある。

支那には、我關せず『我不關焉』と云ふことがある。自分の受持以外のことには、一切關係しないと云ふことである。何か自分の責任にでもなりさうな場合には、すぐ我不關と答へて、

平氣なのが常である。(これは責任回避である)。コック、ボーイ等、また極めて利己主義である。彼等を雇ひ入れるには、掃除、風呂たき、洗濯、買物、何々、何々と、一々その負擔すべき職域を明らかに指定して、それで月給イクラと、ハッキリ約束をして置かないと、約束以外のことは、決して遣らない。強ひて遣らせる爲めには、別に酒錢を必要とする。コックは飯のことだけ、甲のボーイは、客の應接だけ、乙のボーイは、室内の掃除と、物品の保管が役目だと、假りに分別したとすれば、それ以外のことは、金輪際遣らないのが、支那人の習慣である。コンなことは、下層階級のみならず、各階級、有識者、また例外なしに然うである。實例は後で述べるが、官吏でも、軍人でも、本務の外に兼職をさせる時には、一々別の給料を増加するのが習慣であり、規定外の仕事を命ずると、苦力でも、酒錢をネダリ、ヒドい話だが、金を出さなけりや、火事場の水も呉れないと云つたのが、往々にしてある。

支那人は、妙なところに見識振つて、ボーイなどは、自己の門内の掃除はやるが、門外一步を出づれば、犬の糞、馬の糞が、山のやうに堆積して居ても、敢て掃除をしないと云ふやうなのがある。蓋し門外は、市役所の苦力が遣るべきものであり、我輩はコンな役目ではないと云

て居る。人々が官吏とならうとするのも、無理からぬことであると、云はなければならぬ。この項目は、金錢に関する記述が、餘り多くなつたが、支那人生活の大半は、金錢故であり、一事一物金錢慾を、對象としないものはないのであるから、自然斯んな結果になつたのである。

## 面 子

ラツキョウの皮ト乞食にも面子ト相見の禮ト紙幣トラで頼つ  
べト仲裁と警察ト頌徳表ト妙な面子ト賣國奴ト三千世界の  
島ト野蕪と閩男ト女人税ト報國の裏

支那に、儀禮三千、威禮三千と云ふことがあるが、支那人位、形式、體面、外形を重んずる民族はない。『門を出づるに四馬を以つてし、住むに王公の構を以つてする』と云ふことが、彼等の理想である。體裁、體面、面子、外形、これは金錢慾と共に、彼等の日常生活の重大なる半面を形成して居る。

金も欲しいが、自分の顔も立てたい。これが彼等の切願なのである。これは矛盾であるが、支那人は飽くまで、この矛盾を通はさうとする。支那人は、矛盾性が多くて、色々な相反する性格の持主であると云ふのも、斯んなところから起る現象である。例へば哲學者然として、悠悠日月の外に、人生を超越する點があるかと思へば、一錢、二錢の金を争うて、眼を皿のやう

にして喧嘩をする。金錢にケチで、金は咽喉から手が出るほど欲しい辯に『男子功名を立てんと欲すれば、錢を惜むなかれ』など、洒落れたことを云ふ。人から受けた恨みは、千百年も忘れ得ない辯に、人の御恩は、明日まで待たずに、忘れて終ふ。何處まで多面的であるのか、何處が奥底であるのか、その真相、眞諦の掴めないところに、支那人根性の本體がある。畢竟支那人は、ラツキヨウのやうな民族である。皮を一枚づつ、終ひまで剥がして行くと、トウトウ皮ばかりで、一つも實はない。併しラツキヨウは、やはりラツキヨウである。奥行の分らない、實質の掴めないところが、支那人の本質なのである。

108

話が十分脱線したが、面子とは、體面、體裁、顏を立てる、男を立てるなど、云ふことで、支那獨特の考へ方から、生み出された體面粉飾のことである。紳士も使へば、商人も使ひ、乞食にも面子がある。堂々たるロヒゲの紳士が、ステツキをヒヤかして『お前のやうな斯んな立派な大きな店で、斯んなステツキを、十元に負からないやうでは、店の面子に拘るではないか』と云へば、『オーライ面子』と、スグにも負けたいと考へるのが彼等である。反對に『アタタのやうな立派なロヒゲを生やして、立派な眼鏡を掛けて、これが十二元を買へないでは、ア

タタの面子(俗態)に拘りませう』と云へば『オーライ面子』と、黙つて買つて行きたいのが、支那人であり、そこに面子生活の裏と表がある。例へばイクラ買物をネギつても、歩み寄りが出来ない時には、『爾的面子、還給五角』(御前の顏を立て、ではモウ五十仙出さう)と云へば、先方も『あゝよろしい面子、面子』と云つて、納まるのが實際である。停車場あたり、衆人環視の中で、手抜きなく、人につき纏ふ乞食がある。斯んな時、つき纏はれた人は、乞食に一仙ボンと投げ出してやるが、支那人は、つき纏はれた以上は、イクラか遣るのが、乞食に對する紳士の面子だと、考へて居るのである。

109

電話の覺設を頼んでも、家の修繕を頼んでも、苦力や、大工は、仕事のお仕舞には、必ず酒錢を呉れと云ひ出す。金持や、紳士は、催促されない内に、これを出すのが、彼等の面子であると考へ、また催促した以上は、タトヒ十仙宛でも、貰はなければ、納まらないのが、苦力共の面子である。

その辯先方から、イクラ呉れとは云はない。車夫の如きも『アタタの御隨意に』と云つて、決して金高を明示して要求はしない。『見計ひで呉れ』と云ふのが、彼等の相手に對する面子で